

令和元年度学生による授業評価にもとづく学長表彰

講義の取組みについて — 現状と課題 —

医療栄養学科 金山 和樹

今回、講義の取組みについてご紹介させていただく機会を得ましたので、ここに述べさせていただきます。担当する講義はすべてパワーポイントで実施し、教科書と配布資料（パワーポイントを印刷したもの）で講義を進めています。資料作成時に心掛けている事として、1枚のスライドの情報量をなるべく少なくし、重要なポイント（特に国家試験に出題されるポイント）を分かりやすくするようにしています。また多くの学生が専門用語の理解に苦しみますので、講義時なるべく噛み砕いて説明し、苦手意識を無くすように努力しています。学習している知識がどの科目にどのように繋がっていくのか、他の科目との関連性（例えば免疫学と免疫検査学、解剖組織学と病理組織学・病理検査学）や学ぶ意義、重要性についても説明を加えて学習を促すようにしています。現状では基本的な方法で国家試験を軸に講義を展開しておりますが、今後は、今の講義方法・内容に加えて医学を学ぶ面白さをどのように学生に伝えていくかを課題として考えていきたいと思っております。

1年生の前期の講義において工夫していること

医療福祉学科 渡部千世子

1年生は大学という新しい環境での学びに期待を抱き、学びのモチベーションは高いように思います。一方で、主体的な学びを重視する大学の講義形式に馴染んでおらず、一挙にその変化に適応させるのは難しいと考えます。そこで私の担当する1年生前期の講義は、知識の習得と心理学への興味を広げる目的で、教科書の重要点の説明、関連する事象を映像で紹介、復習問題の提示の3部構成で行っています。定期試験は毎回の復習問題から抽出し、再試の不合格者には個別面談を行い勉強の方法が適切であるかどうか確認しています。そこから、学習方法の問題だけでなく知能や認知の特徴が推測され、よりきめ細かい指導が必要であることを認識することもあります。1年生の前期の躓きはその後への学びに影響を与え続けますので、早期に学生の問題を発見して、大学の学びに合う学習方法や社会性を身につけることができるよう指導することが大切であると考えています。

“やらせればできる”の観点から

臨床工学科 大無田孝夫

工学系科目において、教科書の内容は理解できるが、試験では点数が取れないと言う学生が多い。単純に、演習不足が原因であるので、小テストや宿題でなんとか練習してもらおうと課題を課すのであるが、しっかり課題を行ってくれるのは成績上位の学生である。結局のところ演習不足が問題なのではなく、“自主的に演習を行えない”ことが問題であると考えた。“やればできる”のではなく“やらせればできる”ということである。

以上から2019年度から医用物理学Iにおいては、講義を50～60分に圧縮し、残りの時間を演習時間として運用している。幸い後ろのコマに講義が入っていないため、苦手/できない学生は個別指導が可能となる。こちらのチェックを受けない限り退出を認めていないので体感的には期末試験の出来は良くなった印象である。

「できるまで、やってみようよ。」

薬学科 岩島 誠

薬学科1年次生（前学期）対象「基礎化学」では、入学時 Placement Test（有機化学）の採点結果でクラス分けしリメディアル演習を実施している。低迷学生の聞き取りから、その理由が学力よりも知識化過程の練習不足にあることが察せられた。主に該当する50名程度には、幸いにもやる気はあり、出席率がとても良かったので、「できるまで、やってみようよ。」として、水曜3時限の「基礎化学」授業後4時限にオリジナル問題で演習（25分、高校化学リメディアル内容）を実施、4.5時限に解説講義（意識高い学生らには6時限に質疑応答の対応）を行った。解説前に回収答案を確認すると、往生箇所が大体わかるので、解説時に誤りと正解（クセや修正すべき点）をノートに記録させると、30名程度は次回以降の演習（同じ問題ではなく類題）で得点できるようになった。結果が残せない学生に対してはお互いに辛いところだが、2回前の演習問題を反復させ、問題と解答の因果関係の記憶⇌知識化に努めてもらった。「できるまで」の重層的な対応・作業が良かったのではないかと考えている。授業評価の自由記述中に、好ましい表現で投稿してくれた受講した学生が一定数存在したことは、率直に嬉しい限りである。批判的な意見にも配慮していきたい。

老年看護学概論の取り組みについて

看護学科 田中 和奈, 森山小統子

老年看護学概論では、学生が講義に関心を持ち、集中して取り組めるような工夫を行ってきました。具体例としては、国家試験で頻出されている内容など、重要な箇所を穴埋め式にした講義資料の配付を行いました。重要な箇所を穴埋め式にした講義資料を配布することで、「大事なポイントが理解でき、穴埋め部分を埋めるために集中して講義に取り組めた」という学生の反応がありました。また、講義内容に関連した国家試験過去問の回答と解説を毎回講義の最後に行い、講義内容の学生の理解度の把握を実施してきました。また、高齢者疑似体験演習では、学生が高齢者役と介助者役に分かれて様々な体験を行い、高齢者にとって生活のしづらさがどこにあるのかを発見できるような演習を企画するようになっています。

受動的ではなく能動的に学べる学生を育てるために、学生が学ぶことを楽しいと感じられるような学びの場の提供に努めていきたいと考えています。